広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習〈一般〉
Author(s)	浮田, 三郎
Citation	広大言語 , 10 : 47 - 49
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046355
Right	
Relation	

Montpellier, etc）に住む人々によって主張され、後者はProvence地方（Marseilles, etc.）の人々によって支持されている。後者は、南仏が生み、南仏を愛し、南仏を詩った詩人Frédéric Mistral（1830－1914）の言語を南仏語の代表的なものと主張するのでmistraliens（ミストラル主義者）とも呼ばれている。南仏語が古くからlangue d'ocとも呼ばれていたのは事実であるし、またprovençal（プロヴァンス語）が狭い意味ではProvence地方を中心にした一方言を指すことがあるのも事実である。しかし多くの書物において、今日まで南仏語を総称してprovençal（ancien provençal, provençal moderne）と呼ばれてきた。例えばREW, FEW,※註2などの語源辞書もそうである。ここで南仏語全体をlangued'oc（オック語）と呼ぶことを敢て主張する必要があるかどうか疑問が残る問題である。この分野における研究が、学問的でない要素によって毒されないことを願うのみである。

郵送した資料が未着のため、思いつくままの感想を連ねたまとまりのない文章になったが、両学会の一端をでも知ってもらえたらと思い拙文を供する次第である。

註 1. Franco-provençal（フランコ・プロヴァンサル）とは、フランス南東部の、ローヌ河中流からリヨン地方、サヴォア地方、及びロマンド・スイスに至る地方の方言を総称するもので、言語的には北部フランス語と南仏語との中間的存在とされているが、どちらかと言えば南仏語の方に多少近いため、この学会の名前が示すように、南仏語学会の中で一緒に扱われている。

註 2. REW＝W. Meyer-Lübke, Romanisches etymologisches Wörterbuch, Heiderberg

FEW＝W. von Wartburg, Französisones etymologisches Wörterbuch, Bâle.

教　育　実　習

浮　田　三　郎

教育実習の感想を書けと言われ、今それを書き始めて、それに対して少なからぬ感謝の念が起きて来るのを感じる。見上げれば、冷々と広がる黒い空、木枯しに吹かれて、淋しく泣く枯葉、静かに、わずかにキラキラしておいでおいでしている川の黒い面、この灰色の地獄に向うかの様な冬へ

の道程の中で、ぼくにも、この小さなけれどあたたかそうな、子供達の群がる灯を、後の方にではあるが、すぐそばに思い出させてくれたのだから。そして、それは、初夏六月の太陽にも、また秋十月の満月の光にも似ている。そこには初夏の陽光の下、生き生きと息づく若葉の中で群がる小さなスズメ達もいた－実際は、六月は梅雨期で、うっとうしい毎日が続いていたのだが。また、秋は夜空に散らばる冷いしかし生なる光を持った星も輝いていた。

実際ぼくは、子供達と遊ぶのは好きだった。メイ達と遊んでいれば、いやな事を紛わすことも出来たし、それを忘れることも出来た。しかし、今度は違っていた。メイ達なら、ぼくをかなり知っていてくれるから、何か失敗をしても、圧迫感と云うものは感じなかった。「今度は、そうはいかない。」と思っていた。やはり、何か責任感とか重圧感とかいうものを感じた。それは、子供達に対して、また自分自身に対してのものだった。二年生の終り以来うっせきして来た、人間の問題とか、云々の問題とか、自分自身の中での不和が、いつも頭をかすめて、この不安定な精神状態のまま、自分自身の無いまま、この美しき魂の持ち主達と遊ぶのは、いや、いわんや教えるなどということは、出来そうになかったのだから。

でも、人間て面白いものだ－ぼくも人間の一人だからこう言って良いだろう。あの子達の中に入っていって二日目から、ぼくの中の毒気と言うものは、すっかり(?)消されてしまっていた様だった。梅雨の様な気持で、とび込んだ一日目は、まだどうしても割り切れない気持でいっぱいだった。実習は、教生の数が多くて、各々一回ずつで、ぼくは算数を受け持ったが、その時は五日目位いで、もうみんなとかなり親しくなっていたので、楽しく授業を進めることが出来た。最後に書いてもらった感想に、「さぶちゃん先生は、ぼくらよりも無邪気だった。そして勇気とファイトを与えてくれた。」と云う風なのがあった。読んだ時、何とも言えない苦笑いの様なひきつりをほゝに感じた。確かに、毎日みんなが帰るまで残って遊んでいたし、またそれが、本当に楽しかったのだから。そして、勇気と言うものを与えてもらったのは逆にぼくの方だったかも知れない。ともかく、こんな仲間がたくさん居て、こんな仲間と遊ばれたということだけでも嬉しかったのだ。たった一週間ではあったが、彼らはぼくのよき友達だったし、またぼくも彼らのよき友達になり得たと云う自己満足的なものに過ぎないかも知れないが、確かに、梅雨のあのじめじめした曇り空も、ぼくの内では、春の青空になっていたのだ。

そして、その子供達に囲まれた六月の一週間の灯は、ある時は小さく、ある時はだんだん大きくなってぼくの足跡を照らしている。

冬空の月は、冷やかに、枯葉の舞う夜道を照らすが、十月のそれは、まだ暖くその金色なる光を持っている。黒い空に、明日の希望を持って生き生きと輝く星の群れにとび込んでいったのは十月

の始めであった。あるものは冷やかに、あるものは暖く迎え入れてくれた。しかし、六月の小スズメ達と比べて、かなり遠くで輝いているこの星達と、よく知り合い、よい仲間になるには、この二週間という期間は、「へ」の足し位にしかならない程短かったと云う残念さや、その他の不満と同居しながら、多くは楽しい想い出となって、皮肉な顔も、ニコニコした顔も、風に吹かれて、このにくらしい程秋々しく広がる青空に散らばっている。

まだまだ可愛い中一のクラス。一番楽しい時期の高二のクラス。始業のチャイムが鳴り終ると同時に教室に着いたぼくに、廊下で、「先生、今日は一時四十分からですよ！」と言って、「あゝそうネ？」と言って帰えりかけたぼくを見てかなり喜んでいた高一のいたずらクラスーでも、授業はバッチリ(?)。ぼくのbroken Englishを笑っていたかも知れない高三の出来るクラス。

授業中アクビをして、目を赤くしながら、申し訳無さそうにこちらを見ていた中一の女の子。ぼくの発音を正してくれた中三の男の子。後から聞けば、英語に関してはクラスで一番出来が悪いのだそうだが、文法の時間、書き換えの時、「絶対に自分でやる！」とニコニコしながら、指名されたことに責任を感じ(?)、黒板と自分の席を何度も往復して、出足からぼくの時間配分表をズタズタにしてくれ、なおその後も、絶えず笑みを浮べ「わからん、わからん！」とぼくをはげましてくれた一番前の一番窓よりの高二の男生徒。

先輩諸氏から聞かされていた意地悪も、意地悪さによりけりだが、一緒になってやれば、意地悪もまた善意からとかなんとか、思わず「少しはイジメてくれよ！」と言ってしまった。でもせっかくのチャンスなのだから。

グチをこぼせば、残念なことも色々あった。久しぶり夜遅くまでかかってやっと作った教案が、夢の中で舞っていた。次の朝、頭の中に入っているはずの手順がどこかへ行って――これを上ったと言うのだろう？――しかたなく、ノートを開いたら、「あっ、やっぱり書いとってじゃ！」と言う女の子の声が開えた。ますます上った。oral introduction in Englishも、英語で始めて二十五分、日本語が非常に出にくく、不自然さまで覚えた。教案通りのリハーサルを何回も前夜やって出たという先輩の話からすれば、まだまだ準備不足だったと思う。また、教生にとって、ほとんど生徒を知らないし、どの様なprocessの中の一時なのかを、なかなか一回そこらの対面で、得ることが出来ないということ、大学で習ったtable studyなる立派な理論は、一体どれだけ現地に反映させられるのか、などの口惜さを覚えながら、二週間が終っていた。

残念さは良き経験として、楽しさは良き想い出として、ぼくの四年の足跡の中で、いつまでも残っていてほしいものだ。木枯しが、やがて、雨戸をたたき、あの白い雪を里の山に運んで来ても。